

「忘れ得ぬ労使の人々」第28話・番外編

「ライダーの顔を持つ学者」 倍田茂樹 安全保障問題研究会 会長

タバリシチ（同志）と上司に呼び掛けられた。満鉄の幹部だった経歴を持つ人で時々ロシア語の単語を口走る。

上司が口にしたロシア語の単語で、今も忘れず思い浮かぶのはダスピダーニヤ（さよなら）とスパシボ（有難う）の3語だけであるが、ロシア語とはなんと音律の美しい言葉だと思ったものである。

ある時この上司に呼ばれ青学（青山学院）の倍田茂樹助教授が、日本の生産性に関心をもつソ連の学者を連れてくるので君が説明しなさい。粗相のないように準備しておけと申し付かった。

倍田先生はソ連研究に関しては右に出るもののが居ないと私も耳にしていたのでいさか緊張した。

当時は東西冷戦時代のまっただ中であり、東側の盟主ソ連の最高指導者の地位にあったのは、とかくの噂を漏れ聞く評判の芳しくないブレジネフ書記長であった。

命じられたこととは言え気の進まない申し付けと心の中で思いながら、他方では初めて接する東側の人間”ソ連人“の相手をすることに、好奇心が掻き立てられ資料つくりに励んだものである。

応接室に倍田先生がソ連の学者を伴ってやって来た。先生との初めての出会いである。

名刺交換をした時の先生は、若く冷徹な学者然とした雰囲気を身にまとい近寄りがたい方のように感じた。

先生は無駄口をたたくことなく、私がしゃべる日本の生産性に関する説明をロシア語に翻訳し相手に伝える役割に徹しておられるように写った。

鋭利な風貌をした余計なことはしゃべらない寡黙な学者だというのが私の抱いた先生の第一印象である。



講演する倍田茂樹先生

先生がロシア人に何かを説明している。初めて耳にするロシア語の会話である。先生の話すロシア語は美しい旋律を持った小川のせせらぎのような言葉だなと思った。ロシア語の意味は少しも判らぬが、低い声でぼそぼそと先生に話しかけるソ連の学者のしゃべりにさえ美しい響きを感じた。

ロシア人は私が説明している最中でも、判らぬことがあると質問してくる。内心こんなことが理解できないのか、資本主義社会では当たり前、言わずもがなの質問に体制の違いを強く感じながら応対したものである。ノックをして扉を開けたのは、先ほど来客のためにコーヒーを運んできたアシスタントである。会合の最中なのに何か用があるのかと思ったが、お代わりの紅茶をもってきてくれたのである。後で聞くと上司が心配して様子を見て来いというので二度目のお茶を持っていきましたと言って笑った。三時間が

過ぎどうやら生産性運動の概要を理解したと見え、広げた資料やノートを片付け始めた。先生にお昼はどうするのかと問うと心配しなくともいいと素っ気なく告げられた。

ロシア人が立ち上がり『スパシーボ！』と握手を求めてきた。よく上司が口にする言葉なので意味はすぐに判った。私も立ち上がり彼の手を強く握った。

彼はお礼だと言ってラベルに ARARAT と記された瓶を差し出した。袴田先生はソ連の高級なブランディです。美味しいですよと笑いながら説明して下さった。

先生がほほ笑んだ。初めて見せた笑顔である。エレベータまで見送り大役を終えほっとした。

この時、以後先生との交流がまさか 40 年に渡り、ほそぼそだが途切れることのなく続くとは、私も無論先生も想像すらしなかったに違いない。人の縁とは不思議なものである。

ロシア人からのお土産を上司に渡そうとすると記念の品だきみが頂いておけと言われた。私は下戸なので酒好きの部員に渡そうとした。すると部員たちは、ソ連の酒なんてなかなか手に入らない貴重品なのでもらえないと尻込みして誰も受け取ろうとはしなかった。結局ソ連からの珍客を迎えた記念品として、またこれは話の種にもなると考え、家に持つて帰り麗々しくサイドボードに飾った。

それからしばらく様々なところで、ロシア語の持つ美しい響きや、珍しいソ連のブランディを持っていることを自慢げに吹聴したものである。時には酒のみから「宝のもちぐされだ」俺に飲ませろとからかわれたりもした。



アルメニアのアララト社

先年旅行会社が企画したコーカサス地方のツアーパーに参加した。アルメニアの首都エレバンのメトロポールホテルに陽が落ちてから到着した。レストランも部屋も思いのほか立派なホテルである。強行軍であったのですっかり疲れ、遅い夕食を済ませて早々にベッドに潜り込んだ。

翌早朝、目が覚めカーテンを開くと谷間をはさんだ丘の頂に赤いレンガ建ての大きな建物が建っていて看板が見えた。キリル文字でなく英文字で「A R A R A T」と読める。

室内も外を眺めながらその文字を見つけ、袴田先生が連れてきたソ連の方から頂いたお酒と何か関係があるのでないかと私に問う。夫婦で同じ追憶をしていたので何となく可笑しさがこみ上げてきた。

朝食の時に日本語の達者な現地ガイドに A R A R A T と書いてある丘の上の建屋は何だと聞くと、 A R A R A T は有名なお酒の会社ですと説明してくれた。今も手元にあるブランディの故郷はここアルメニアであったのか、はるばる遠い日本へようこそと感慨も一入であった。

ジョージア（旧グルジア）のゴリ市へ案内された。ゴリ市はソ連を長年牛耳ったスターリン首相の生まれた故郷で 5 歳まで過ごしたところである。一家はその後首都トビリシへ移ったそうだ。

余談だがスターリンはロマンティックで詩を詠んだそうだ。あの鉄面皮が詩を詠むなど俄かには信じられなかったが、その詩は小学生の教科書に載っていたとのことだ。

ゴリ市には篤志家によってスターリン博物館が建てられていて見学した。広い敷地の一角にスターリンが生まれ育った一部屋しかない狭く小さな木造家屋に大きな覆いをかけ保存している。いかにも貧し気なこんな家をクレムリンの主となったあの独裁者が衆目にさらすことをよく許したものだと思ったものである。このことが頭に残っていたので後年先生に尋ねたことがある。

社会主義国なので自分によって立つ生い立ちが貧しく、そこから這い上がって来たあかしの家なのだ。先生の答えは短く明快であった。

1980年代、関税や様々な障壁によって庇護されてきた日本企業であるが押し寄せてくる市場開放を迫る諸外国の圧力は日増しに強まり、日本もついに門戸開放やむなしの方向に潮目が変わった。

生産性本部は産業界から国際化に対応できる人材育成を急げという声に呼応して、これまで実績を重ね経営の大学院と評価の高い“経営アカデミー”に新たに国際コースを設置することとなりそのコンテンツの開発を命ぜられた。

来年度にオープンするためには残された時間はそう多くはない。カリキュラム編成会議では喧々諤々の議論が深夜にまで及んだ生みの苦しみをほろ苦く思い出した。

当然のことながらカリキュラムには東側諸国の諸課題も盛り込まれなければならない。東側の情報や知見はこの方を置いてない袴田茂樹先生に講師を依頼し快諾頂いた。

国際コースが開講し袴田先生は政治体制を中心とした一般には窺い知ることのできない共産圏の諸問題を具体的な例を挙げながら、さらにソ連の歴史や政策、はては為政者の行動や日本とのかかわりなど余すことなく開陳された。

一方東側の諸事情に精通されている先生はすでにマスコミの寵児であり、東側で起こる事象や問題には専門家の立場からテレビや専門誌にしばしば登壇し解説されていた。

この頃のことであるが、息子が熱心にテレビを見ながら珍しくメモを取っている。何を見ているのかと画面を見ると青山学院の袴田先生が話をしている。黙って画面と一緒に見た。番組が終わるや、やおら子供が“僕は袴田先生の授業を受けているがお父さんはなぜ知っているのか”と問い合わせてきた。これまでの経緯を話すと驚いたような顔をした。

以来先生には神奈川県生産性本部の責任者となって転出し企画した「トップマネジメントクラブ朝食会」や「国際問題研究会」などでも講演をお願いした。



トップマネジメント朝食会・左3人目袴田先生



右連合神奈川会長と先生左端ゼロックス木村茂夫氏

生産性本部を退いた後、手伝っている「日本モロッコ協会」の講演など、ロシアに関する問題というとまず袴田先生の顔が浮かび、その都度先生に講演をお願いしてきたのである。

振り返るといつも“困った時の袴田頼み”であったと微苦笑してしまう。

労組組織である連合神奈川の会長から労働組合の幹部にも袴田先生の講演を企画したいので先生を紹介してくれと請われて紹介の労を取ったこともある。

研究者とは書斎にこもる本の虫、無趣味で気難しい偏屈な人のイメージを持っていた。

袴田先生は世間では評価の定まった学者であることは周知の事実だが、学問の傍らライダー憧れのハーレーダビットソンを乗りまわすことを知り「えっ！あの先生が！」と正味仰天した。

私もオートバイは若いころに挑戦したかったもののひとつである。母親はオートバイに対し“不良が乗



愛車ハーレと袴田先生の雄姿

りまわすもの”だという偏見を持っていたし、家内には危ないので絶対やめてもらいたいと止められ断念した経験がある。迂闊にも先生に私がオートバイを諦めた経緯をメールしたことがある。

すると「不良の袴田……」とユーモアに溢れた返信を頂いた。先生からのメールを見ながら「しまった！ いうに事欠き”不良“などとつまらぬことを先生に言ってしまった」と顔が赤らんだ。

後日富士山とハーレーダビットソンをバック

にジーンズに皮の脛あてを付け、ブーツを履いたライダーの正装姿？の写真を頂いた。普段見慣れている先生からは、とても想像すらできないほれぼれするような格好の良さである。

久しぶりにお目にかかった時、私が尊敬する防衛大学校の佐瀬昌盛先生の後を引き受け「安全保障問題研究会（通称アンポケン）」の会長を引き受けたと新しい名刺を下さった。

アンポケンのメンバーはそうそうたるキャリアを持った方々である。無論先生も日本の安全問題に関する情報や論文を毎号会報に載せているが拝見すると単なる時事問題の解説というより学術論文のような格調の高い文面である。毎号拝読しながらボケ氣味の頭に大いなる刺激を与えていただいている。

モロッコ協会での講演が縁となり、広瀬元モロッコ大使と協会の副会長を務める西尾 ENEOS 元会長とが、袴田先生ご夫妻を迎えて横浜中華街で会食する機会を持った。袴田夫人は人をそらせない粋な方であり大学教授の肩書を持つ才媛である。

会食は談論風発、話題やしゃべりにかけては、このメンバーはどこに出ても引けを取らない面々である。幹事役の私が口をはさむ余地は皆無であった。

黙して聞き役に徹しているが料理が次々運ばれてくる。皆さん話に夢中な中、私は料理をとりわける役を引き受け皆さんの中に並べた。



右側袴田夫妻・左奥 ENEOS 西尾元会長と広瀬モロッコ元大使

この日の先生は饒舌で話に熱を込めて料理に手を伸ばすゆとりがない。小皿が溜まると奥方が小声で召しあがれと促す、すると先生は話を止め料理を口に運ぶのである。私は多分お宅でも同じことなんだろうなと仲睦まじいご夫妻を羨ましく眺めた。

その後先生とはメールのやり取りをするようになった。先生は若いころと比べ随分人触りが柔らかくなった印象を受ける。

いただぐメールには時としてユーモアや茶目っ気を感じことがある。ロシアで大ヒットした加藤登紀子の歌う“百万本のバラ”を聞きながらこの先いつまで交流が続くのかと思うがこれぞ神のみぞ知るであろう。

最近の先生は重量があるハーレーダビットソン操る体力を維持するためにジム通いをされていると漏らされた。

よし私も先生に負けずに何かやらねばと思っているのが・・・・。ニエット何も思い浮かばない。